

- \* ICU に入学を希望する受験生の学習のために公開している資料です。  
ICU 公式の試験問題用紙ではありません。  
(This is NOT the official Exam.)

No.000001

受験番号					
------	--	--	--	--	--

学習能力考査  
社 会 科 学

資料及び問題  
指示

係りの指示があるまでは絶対に中を開けないこと

0. Keep Going!

1. この考査は、資料を読んで、あなたがその内容をどの程度理解し、分析し、また総合的に判断することができたかを調べるためのものです。
2. この冊子は前半が資料で、後半に 40 の問い(1-40)があります。
3. 考査時間は、「考査はじめ」の合図があつてから正味 **70 分**です。資料を読む時間と解答を書く時間の区切りはありませんから、あわせて **70 分**をどう使うかは自由です。
4. 解答のしかたは、問題の前に指示してあります。答えが指示どおりでないと、たとえそれが正解であっても無効になりますから、解答の仕方をよく理解してから始めてください。
5. 答えはすべて、この冊子といっしょに配られる解答用カードの定められたところに、指示どおりに鉛筆を用いて書きいれてください。一度書いた答えを訂正するには、消しゴムできれいに消してから、あらためて正しい答えを書いてください。
6. もしなにか書く必要があるときは、必ずこの冊子の余白を用い、解答用カードには絶対に書き入れないでください。この冊子以外の紙の使用は許されません。
7. 「考査やめ」の合図があつたらただちにやめて、この冊子と解答用カードとを係りが集め終わるまで待ってください。集める前に退場したり用紙をもちだすことは、絶対に許されません。
8. 指示について質問があるときは、係りに聞いてください。ただし資料と問題の内容に関する質問はいっさい受けません。

「受験番号」を解答用カードの定められたところに忘れずに書き入れること

## タイトル ( )

### はじめに

知らない土地を訪れると、見慣れない風景に新鮮な驚きを覚えたり不安になったりする。特に自分が慣れ親しんできたところとの違いが大きければ大きいほど、驚きや不安が増すであろう。旅の醍醐味は、こうした違いを楽しむことに他ならない。たとえば、パリのノートルダム寺院を訪ねたとしよう。寺院の威圧的な外観、そしてその中に足を一步踏み入れたときの荘厳な雰囲気。そこを訪れた人々は、おそらくその独特な空間に圧倒されるのではないだろうか。明らかに現代の建造物とは異なる何かがある。それは、まさにこの寺院が建てられた時代の人々の意識がそこに反映されているからに違いない。

では、現代の建造物はどうか。たとえば、都市に屹立する超高層ビル。これらは、そうしたものを望んでいる私たちの意識の結集であるといえる。新幹線や飛行機といった交通手段も、より早くて便利なものを求める私たちの意識が生み出したものである。近代化の過程において次々と発明されていった乗り物やその他生活を便利にしてくれる機械などは、効率化への欲求によって登場してきたものといえる。そのようなものがいったん生み出されると、こうした意識がさらに増幅される。もっと効率のよい便利なものを望むのである。マクルーハン（1987）が言うように、「メディアはメッセージ」なのである。

このように私たちは周りのものと常にコミュニケーションしている。コミュニケーションというと、人と人との関係を思い浮かべる人が多いが、それだけにはとどまらないのである。ここでは、このようにコミュニケーションを広い意味で捉え、私たちがどのように空間とコミュニケーションしているのかを探ってみたい。

### 都市空間と「疎外」

前述のように、時代や地域によって異なる風景が広がっていることは確かだが、その一方でどの都市に行っても同じような建物やチェーン店が並んでおり、あまり代わり映えのしない光景が広がっているともいえる。高層ビルが立ち並ぶ街並みは、一見するとどの都市なのか分からない。マクドナルドやバーガーキングといったチェーン店は、大都市であればどこにもある。高速道路や鉄道網といった高速輸送システムが、都市と郊外とを結ぶ。また、大都市であれば必ずといっていいほどスラム街があるし、ホームレスの姿も目に付く。

さらに、その都市に暮らす人々の生活はというと、まず家庭と職場が分かれていることが多く、

なんらかの交通手段を用い、その両方を往復する生活を営む。職場においては、都市経済を支えるためのなんらかの生産活動に従事する。家庭での生活はというと、まず生活に必要な物は市場やスーパーなどで購入することによって賄う。そして、たまには家族で外食をしたりと、家庭外の家事サービスも利用する。いわゆる家事の外注化である。つまり、都市空間において人々は大量生産に加担し、かつ大量消費の一翼も担っているのである。

ただし、この一翼を担えない人は、都市空間の片隅へと追いやられてしまう。まるで、巨大な<機械=都市>を動かしているのが機械のパーツとしてのそこに住む人々で、その<パーツ=都市の住人>の性能が落ちれば簡単に取り替えられてスクラップ置き場に追いやられるかのようである。機能性・効率性を重視する都市空間では、「性能の落ちた人々」は「お荷物」として扱われる。ルイス・マンフォード（1972）が言うように、都市は「人類史上最初に発明された機械」なのかもしれない。

機械のパーツのように抽象的なモノとして扱われる人々は、その人間性を奪われる。人は本来他者とのつながり、つまりコミュニケーションによって自己を意味づける存在であり、本質的に（ ）な存在である（マルクス、1964）。だが、都市空間においては、まるでそれぞれがばらばらに存在しているかのように振舞っているのである。見知らぬ他人同士がひしめく電車やバス、お互い親しげに声を交わすことなく行われるスーパーやコンビニでのやり取り、隣に誰が住むのかも知らない。こういった都会の風景がそうした姿を物語っている。

フリードリヒ・エンゲルス（1990）は、都市に住む人々のお互いに対する無関心さがいかにおぞましいものかを19世紀のロンドンの雑踏のなかに見出し、次のように語っている。「だれも他人には目もくれようとしな。非人間的な冷淡さ、私利私欲への各個人の非情なまでの孤立化は、これら各個人が限定された空間に押しこめられれば押しこめられるほど、ますますいとわしい、不快なものとなってあらわれる」。ここでは、都市における人々の生活がいかに本質的に「疎外」されたものであるかが指摘されているかのようである（毛利、1999）。

近代になって自由な空間の移動が可能になり、都市は様々な人々がひしめき合う魅力ある空間として人々をひきつけてきたが、同時に様々な問題を抱える空間でもある。あらゆる地域から多様な人が集まり、様々な活動が行われる都市空間は、近代以前には考えられなかった自由を人々に与えてくれたと同時に、見知らぬ者同士がいかにうまくやっていくかという問題を人々に突きつけたのである。

## 監視社会

その問題に対する1つの回答として用意されたのが、監視体制の強化である。つまり、見知らぬ者はまず疑ってかかるべきで、怪しい者が自分の領域を侵さぬよう、よからぬことをしないよ

うに常に見張る必要があるとする考え方である。その考えを実践する1つの方法が、監視カメラの設置である。

いまや都市のいたるところに監視カメラが置かれている。駅や高速道路、コンビニ、スーパー、繁華街や商店街、ATM（現金自動預け払い機）の設置場所、マンションの入り口や駐車場などあらゆる場所に防犯目的で据えられている。監視カメラを避けて街を歩くことなど、ほぼ不可能である。世界でもっとも監視カメラの設置台数が多いとされているロンドンでは、1日街を歩けば300回は映るといわれている（2005年7月15日付神戸新聞）。監視カメラの設置台数が急速に増えつつある日本でも、かなりの回数に上るのではないだろうか。

さらに、カメラによる監視の強化だけでなく、カメラによらない監視の形も進んでいる。たとえば、指紋や瞳の虹彩、静脈、声紋、掌形、網膜パターンなどを利用して個人を識別する「生態認証（バイオメトリックス）」である。最近では、暗証番号よりも安全であるとして、クレジットカードやキャッシュカードの不正使用を防ぐ目的で普及が進んでいる。また、安全管理を徹底するために、「血流認証システム」や「虹彩認証システム」を取り入れて、それを売りにしているマンションもある。2006年5月には、鉄道機関を狙ったテロへの対策として導入が検討されている「顔認証システム」の実験が、東京メトロ千代田線霞ヶ関駅の改札で行われた。出口付近の天井に取り付けられた動画カメラ2台で改札を通る人の顔を撮影し、あらかじめ「危険人物」として登録されたデータと一致すれば警報音になるシステムである。

子供にICタグやGPS（全地球測位システム）機能がついた携帯電話を持たせ、居場所情報を提供するサービスを導入する幼稚園や学校、自治体も増えつつある。子どもが巻き込まれる犯罪がメディアでたびたび報道され、危機感を覚えた保護者の声を反映した動きだと思われる。実際、2006年8月に内閣府が行った「子どもの防犯に関する特別調査」でも、子どもたちが犯罪の被害者になるかもしれないという不安を感じている人が7割を超えている。

このように、私たちが住む社会は様々なテクノロジーを駆使して監視する／される社会、つまり監視社会となってしまったようである。しかもその監視社会を望んでいるのはそこに住む人々自身なのである。生態認証システムを導入したマンションが次々と登場したり、子どもの安全を守るためのテクノロジーが学校などに導入されたりといった動きを見ると、そう考えざるを得ない。事件の解決に「監視テクノロジー」が一役買ったというメディアの報道を目にするたびに、監視を望む声が高まりそうなる勢いである。

だとすると、ジョージ・オーウェル（1972）が『1984年』の中で描いた監視社会と現在進行している監視社会とは、まったく異なった様相を呈しているといわざるを得ない。前者の中に登場するのは全体主義社会で、そこでは国民の生活が「テレスクリーン」と呼ばれる監視カメラによって管理されている。上から下へ権力が行使される世界が、描かれているのである。だが、現在私たちが経験している監視社会では、必ずしも上から強権を発動して私たちに監視・管理しよ

うとしているわけではない。むしろ自らが監視・管理されることを望み、自らの選択として監視システムを利用しているのである。監視する主体が私たち自身であり、監視されるのも私たち自身なのである（鈴木、2005）。

## 監視の広がり

現代の監視システムは、私たちの生活の細部にまで忍び込んでいる。公共の場における監視のみならず、私的空間とされてきた家庭やプライベートな個人の活動にまで及んでいる。たとえば、家のパソコンからインターネットにアクセスして、本を購入するとしよう。ネット上の「本屋」で欲しい本を検索し、クレジットカードで決済するというごくありふれた日常での行為である。

まず、サーチエンジンを使って、目的の本にたどり着いたとする。すると、画面上に「この本を購入した人は他にもこういう本を買っています」とか「おすすめ商品」のリストが表示される。次に本を買うときの参考にもなるし、知らなかった本を知る機会にもなり得るし、一見すると非常に便利なサービスのように思える。だが、それと同時に押し付けがましさを感ずる人もいるかもしれない。

どうしてこうしたサービスが可能なのであろうか。実は、オンラインを使って買い物をするということは、自らの情報を提供することでもあり、そうした個人データが記録され蓄積されることによって、このようなサービスが可能となっているのである。

クレジットカードを使うのも、同様に個人データ収集システムに加担していることになる。カードのデータベースには個人の商品購入履歴が登録されており、他のカードのデータとともに集積されるのである。要は、データベースと個人の関係は、現代社会の監視システムを維持・管理する上で、（ ）関係にあるといえる。

JR 東日本のスイカや JR 西日本のイコカも、鉄道による個人の自由であるはずの移動を記録するデータ収集装置として機能している。だが、それを使うことによってデータを提供するのは、使用者本人なのである。携帯電話を持ち歩くことも、個人の移動が監視されることにつながる。普段は監視されているなどといったことを意識する人はほとんどいないだろうが、携帯電話の電波を追うことによって犯人の足跡を突き止めたのが事件の解決につながった、といったことが報道されたりすると、携帯電話が監視装置としての役割を果たしていたことに気付かされる。しかし、だからといって携帯電話を持たないという選択をする人は少ない。携帯電話を持つという選択をするのは、監視される本人自らなのである。

スイカやイコカ、携帯電話を持たないという選択もあるとはいえ、便利だからつい使ってしまうの方が圧倒的に多い。それらが監視システムに自らが加担することになってしまうメディアだと分かっているにもかかわらず、なかなか持たないという選択にはつながらない。ここに、東浩紀が言う

ころの「環境管理型権力」が見て取れる（東・大澤、2003）。環境管理型権力とは、物理的な環境を調整することによって、人の行動を制限する力のことである。たとえば、マクドナルドでは客に30分以上の長居をさせないために、硬いイスを使っている（リッツア、1999）。「食事は30分以内」という規則を掲げるよりも、さりげなく消費者を管理する方法をとっているのである。携帯電話も、持つことを強制されているわけではないが、公衆電話の数が極端に少なくなったり、仕事や仲間同士の連絡に携帯電話があたり前になってくると、持たないという選択はとりづらくなる。まさに、環境管理型権力が発動されているのである。

情報テクノロジーは単なるコミュニケーションのための道具ではない。私たちは、クレジットカードや運転免許証、銀行や郵便局のキャッシュカード、図書館カードといったものを利用せずには暮していけないほどデータベースと密接な関係を持ちながら生活している。そして、それらのカードが使われるごとに、その使用の記録がデータベースにコード化と同時に追加されていく。そのデータは瞬時にある意図のもとに並べ替えられ、必要な情報だけが抽出され、なんらかの目的の下に使用される。だが、個人が提供するデータとは常に断片的なものであり、そこから生身の人間の姿が見えてくることはない（ライアン、2002）。

## 繋がりの喪失

データベース化された世界では、人と人とのつながりが希薄になる。たとえ同じ場を共有していたとしても、そこにデータベースによる情報が介入してくると、生身の人間としての姿が遠のいてしまう。たとえば、ある店でクレジットカードを使って買い物をするとしよう。店の店員が客を信用するかどうかは、目の前にいる客を見て総合的に判断するのではなく、クレジットカード会社から送られてくる客の断片的な情報によってなされる。過去の支払い能力、そして将来の支払いの見込みによって判断されるのである。過去に支払いが滞った履歴があると、ブラックリストに載せられている可能性が生じる。ひとたびカードがはじかれると、生身の人間同士の信頼が構築される可能性がそこではほとんどなくなる。つまり、私たちが知るよしもない私たち自身の情報が、こういったインタラクションの空間を脅かすのである。「逸脱の履歴」として自分では知り得ない情報が独り歩きし、思わぬときにそれが自分に跳ね返ってくるのである（ポスター、2001）。

監視カメラがいたるところでわれわれを見張っている都市空間においても、対人関係がますます希薄になってきている。いまや、気軽に近所の子どもに声をかけるというごくありふれた行為ですら、不審の目で見られかねない。また、公共の場における機械化が進み、人と直接接触する機会がますます減ってきている。銀行や郵便局の窓口でお金を引き出すよりも、営業時間外でも下ろせるので便利だとしてATMを利用する人が増えてきているし、改札に駅員が立っている駅

はほとんどない。都市という多様な人々の活動を可能にしてきた空間が、見知らぬ他者に対する不信感を募らせる場として立ち現れてきたのである。

## 関係性の回復

ここでもう一度始めの問いに戻ろう。近代における都市の出現によって、見知らぬ者同士がいかにうまくやっていくかという問題に私たちは直面し、その解決策として監視体制の強化があったのだが、はたして他の方法はないのだろうか。見知らぬ他者とは常に警戒せざるを得ない存在なのだろうか。むしろお互いが顔見知りで、不審者を見かけたとか異変を察知した場合に声をかけられるとかすぐに連絡を取り合えるような共同体が形成されていれば、監視カメラなどを置く必要はないのかもしれない。しかも、防犯カメラの抑止効果に対しては疑問が投げかけられている。監視カメラが設置してある場所でも犯罪が起こっており、だからこそカメラがその犯人の姿を捉えたのである。メディアなどの報道で私たちはそのことを知っている。人工的な監視システムは、人間関係による犯罪抑止力には到底及ばないのかもしれない。

監視システムの強化は、ユルゲン・ハーバーマス（1987）が言うところの「生活世界の植民地化」につながる。非人間的で戦略的な関係性（「システム」）が、お互いの了解と合意に基づいた関係性（「生活世界」）に取って代わることを、ハーバーマスは「生活世界の植民地化」と呼んでおり、まさに機械による監視が人と人との有機的なつながりによる信頼関係を凌駕してしまった様子にあてはまる。だとすると、私たちはもう一度「生活世界」の意味を私たち自身で問い直さなければ「システム」に飲み込まれてしまうのではないだろうか。

都市とは、多種多様な人々をひきつける磁場を持っていたはずである。その可能性を今一度真剣に考えてみるのが、都市の活力を引き出し、都市空間ならではの有機的な人と人とのつながりを見出す契機となるのではないだろうか。見知らぬ他者を警戒すべき者と見るのではなく、その他者との交わりによって今まで経験したことのない何かが生まれる可能性にかけてみるのである。地縁や血縁といった関係に縛られない、流動的ではあるがエネルギーを秘めた関係が生み出されるかもしれない。ハーバーマス（1987）が、ヨーロッパのサロンやカフェといった公共の場で自由闊達な議論を交わす都市の人々の中に可能性を見出したように、見知らぬ他者同士の関係にこそ、既存の価値観を打ち破るなんらかの力を見出すことができるのではないだろうか。

そのためには、都市空間を人間の活動が中心となるような場に組み替える必要があるかもしれない。機械にたとえられる都市からは、本来の意味での人間が締め出されている。たとえば、ストリートは自動車に占有されており、多様な人間の営みがそこでは行えない場と化している（毛利 2003）。人は片隅に追いやられ、常に自動車からの攻撃の危険にさらされている。いつから自動車にストリートを奪われてしまったのだろうか。自動車の一方的な占拠からストリートを取り

戻し、散歩やサイクリング、路上での商い、祭り、デモなどもともとストリートで行われていた多様な活動を復活させなければならない。それらの活動の中から、新たなエネルギーが生まれてくるに違いない。

新たな地域のつながりを作ろうとして生まれた「地域通貨」も注目に値する。基幹通貨の補助として、生活に必要な物資やサービスを地域内で供給・交換するために生み出されたのが地域通貨である。地域内の人々がお互いに助け合って生活することを促進する意味合いを持っている。これまで顔の見えなかった人同士が、地域通貨によって新たな関係を築くきっかけとなり得るのではないだろうか。

## サイバースペースでの可能性

次に、新たな公共の場として注目されているサイバースペースの可能性について考えてみる。インターネット上ではお互いに顔が見えないために、無責任なやり取りや倫理的に問題のある行為が起りやすいといった様々な指摘がなされているが、逆にこれまで想像もしなかったような多様な関係を生み出していることも確かである。上述のサロンやカフェといった物理的時間と空間を共有しなければ成立しなかった議論の場も、インターネット上であれば、ネットにアクセス可能である限り、いつでもどこでも議論に参加できる。同じ興味を持つ者同士が集う場として機能する。

たとえば、双方向のやり取りが可能となるホームページやブログ、ソーシャル・ネットワーキング・サービスなどは新たな動きを生み出す可能性を持つ。一昨年の「耐震偽装事件」のときに証人喚問を求める声がネット上で結集したことで既存のメディアが動いたとされる事例や、RH マイナス型の血液を持つ人同士がネットワークを作るといった動きなどは、インターネットの力を存分に発揮したものといえよう。

また、草の根的市民活動を促進する場としての役割も重要である。1997年1月に福井県沖で起きたナホトカ号沈没による重油流出事故の除去作業に、ネット上での呼びかけに応じて多くの人が集まったのもその一例である。90年代の終わりには、徳島県吉野川河口堰、千葉県三番瀬の埋め立て工事、有明海・諫早湾の干潟事業、鳥根県中海の干拓事業など、公共工事の意義を問い直す具体的な問題が持ちあがり、それに対しネットやメールでのやり取りが重要な役割を果たしていくようになってきた（吉見、2004）。最近では、イラクで人質になった日本人3人の救出を求めて様々な人々がネット上で連帯し、救出を求める声を世界に向けて発信した動きが記憶に新しい。

だが、無料で発言の場を得ることのできるネット上の一見自由な場には、同時に多くの落とし穴が存在することも確かだし、それらに敏感になる必要がある。さもないと、既存のマス・メディアとたいして変わらないことになってしまい、ネットの可能性が閉ざされてしまう。同じ興味や



問題意識を持つ個人をつなぐ場としてのネットの可能性を最大限引き出すためには、今以上に個人の見識が問われているのではないだろうか。

吉見俊哉（2004）は、インターネットを通じたコミュニケーションの可能性を次の4つにまとめている。

- ① 既存の様々な異なる地域やグループ、立場、専門や職種の人々を横断して情報を共有させていく可能性を開いたこと。
- ② こうした情報の横断的な流れが、人々の迅速かつ的確な状況の変化への対応を可能としたこと。
- ③ これまでの社会運動を中心的に担ってきた「組織」ではなく、組織的基盤を持たない「個人」がこうした新たな動きを担っていること。
- ④（ ）でありかつグローバルな社会的実践のネットワークが築かれたこと。

サイバースペース上のコミュニケーションが、これまでにないつながりを生み出したことに異論はないだろう。時空に捉われない広がりをもった関係性の構築を可能にしたのである。

## おわりに

サイバースペースであれ物理的空間であれ、生身の人間同士がかかわっているという実感が伴わなければ新たな可能性は生まれない。ネット上で行き交う断片化された個人情報がいくら集積されようが、あるいは記号化された人間同士がいくら物理的空間を共有したとしても、そこからは何も新たな動きは生まれてこない。有機的なつながりが構築できるかどうか鍵となり、その関係性が空っぽな「空間」を様々な経験が意味を生み出す「場」にするのである。

私たちの欲求が都市空間を生み出したように、インターネットも私たちがそれを望んだから生まれたのである。したがって、それらの空間でどのような関係を築くのかは、私たちが何を望んでいるのかにかかっている。積極的に周り人とコミュニケーションすることにより、今何が必要とされているのかをそれぞれが見つけ直す必要があるのかもしれない。

私たちは単に受身の存在ではない。確かに私たちをある一定の方向に推し進めようとする力が作用していることは間違いないが、その力が何なのかを見出すために、主体的にそこにかかわっていく自由もまた与えられている。強権を発動する権力の主体はもはやいないと考えた方がよい。私たちの具体的な実践を通して、権力は力を発揮する場を与えられるのである。

## 参考文献

東浩紀・大澤真幸『自由を考える ― 9・11以降の現代思想』日本放送出版協会、2003年。

- エンゲルス、F. 『イギリスにおける労働者階級の状態—19世紀のロンドンとマンチェスター 上』  
一條和生・杉山忠平訳、岩波書店、1990年。
- オーウェル、G. 『1984年』 新庄哲夫訳、早川書房、1972年。
- 鈴木謙介 『カーニヴァル化する社会』 講談社、2005年。
- ハーバーマス、J. 『コミュニケーション的行為の理論 下』 丸山高司他訳、未来社、1987年。
- ポスター、M. 『情報様式論』 室井尚・吉岡洋訳、岩波書店、2001年。
- マクルーハン、M. 『メディア論—人間拡張の諸相』 栗原裕・河本仲聖訳、みすず書房、1987年。
- マルクス、K. 『経済学・哲学草稿』 城塚登・田中吉六訳、岩波書店、1964年。
- マンフォード、L. 『技術と文明』 生田勉訳、美術出版社、1972年。
- 毛利嘉孝 『『快適』さと『孤立』—ポストモダン都市としてのキャナルシティの一考察』 『空間  
へのパースペクティブ』 納富信留・溝口孝司編、九州大学出版会、1999年、145-165頁。
- 毛利嘉孝 『文化=政治』 月曜社、2003年。
- 吉見俊哉 『メディア文化論』 有斐閣、2004年。
- ライアン、D. 『監視社会』 河村一郎訳、青土社、2002年。
- リッツァ、G. 『マクドナルド化する社会』 正岡寛司監訳、早稲田大学出版部、1999年。



---

次の問題（1—40）には、それぞれ a, b, c, d の答えが与えてあります。  
各問題につき、a, b, c, d のなかから、最も適切と思う答えを一つだけ選  
び、解答用カードの相当欄にあたる a, b, c, d のいずれかのわくのなかを  
黒くぬって、あなたの答えを示しなさい。

例  $\left(\frac{1}{4}\right)$      a     b     c     d

---

1. この文章のタイトルとして最も適しているのはどれか。
  - a. テクノロジーと「規律型権力」の接点
  - b. 効率性の追求から人間優先の社会へ
  - c. 都市空間における可能性の追求
  - d. 創造的な「場」の構築に向けて
  
2. 異文化と会うことは違いを楽しむことである。この主張と最も近い記述はどれか。
  - a. 日常と異なった経験をすることにより、今までの価値観が変わる。
  - b. これまでの日常から離れ、今までの生活を改める。
  - c. 旅行中の出会いを大切に、新たな関係を築く。
  - d. 他者を知ることによって、それまで気付かなかった自分に気付く。
  
3. 本文では、新幹線や飛行機はより早くて便利なものを求める私たちの意識が生み出したものといっているが、「母国語」はどういった意識の結集といえるだろうか。次の中から最も適切だと思われるものを選び。
  - a. 異なった言語やアイデンティティを持った人々を均質化したい。
  - b. 国家への帰属意識を高めることによって、多言語による弊害を一掃したい。
  - c. 人々の言語への愛着にもとづいて、言語が持つそれぞれの力を生かしたい。
  - d. 言語の身体性を考慮することによって、言語的マイノリティの地位向上を図りたい。

4. マクルーハン「メディアはメッセージである」という命題を提示し、伝達の際のメッセージとは内容自体ではなくむしろ伝達の形式そのものを持つ意味であるとした。これは具体的にどういう意味か、次の例の中から最も適切なものを選び。
- インターネットでのネットサーフィンをするという行為は、その行為そのものに快感を覚えるからこそなされる。
  - 携帯電話で話をするという行為自体が携帯電話というメディアを無化する。
  - テレビドラマに夢中になり、テレビという媒体があることを忘れそのドラマの主人公と一体化する行為が、メディアの媒介性を忘れさせる。
  - テレビニュースと新聞は、情報を伝えるという意味においては同じようなメディアである。
5. 「近代化」の説明としてあてはまらないのはどれか。
- 合理的な生活原理が様々なところに浸透していった。
  - 生産現場における分業システムが普及していった。
  - 人々の自由度が増し、あらゆる制限が取り払われた。
  - 機械時計による時間測定の均一性によって、時間の社会的管理が広がった。
6. 日本における近代化と都市空間の関係について、最も正しい記述はどれか。
- 近世城下町と近代都市は、いずれも身分によって居住地域が分かれていた。
  - 近世城下町は城を中心に発展し、近代都市は官公庁を中心に発展していった。
  - 近世城下町は近代都市に比べると、自由な空間移動が制限されていた。
  - 道路に関しては、近世であれば馬や籠、近代であれば自動車のためのもので、いずれも歩行者を中心としたものではなかった。
7. 都市の発達について最も適切な記述はどれか。
- 17世紀にイギリス政府の農業転換政策によって、ロンドンの都市人口は急増した。
  - 18世紀後半にイギリスに始まった産業革命によって都市人口は急増した。
  - 19世紀後半に、ヨーロッパにおいて土地相続権を持たない農民が大量に都市部に流れたために、都市部の人口が急増した。
  - 都市に人口が集中し始めたきっかけは、20世紀初頭にヨーロッパを襲った恐慌だった。
8. 大都市が共通して抱える問題にあてはまらないのはどれか。
- ゴミ処理
  - 交通渋滞
  - エネルギーの大量消費
  - 少子高齢化

9. 都市人口に関して、最も適切な記述はどれか。
- 現在のところ、人口100万人以上の大都市の数が多地域はヨーロッパである。
  - 世界的にみて、平均すると都市部の人口成長率はほぼゼロに近くなった。
  - 先進国の都市人口は、過去10年間で急速に増えた。
  - 1000万人以上の人口を抱える都市は今後さらに増えるだろうと予測されている。
10. 「家事の外注化」に関する次の記述の中で、適切でないのはどれか。
- 「家事の外注化」により家事が楽になった一方、家事に対する肯定的意味付与ができなくなってしまう逆に外注化を抑制しようとする力も働いている。
  - 子育てに手を抜くと子どもの適切な成長を妨げると考える人が多く、子育ての外注化に対しては慎重な意見が目につく。
  - 食事の個食化と「家事の外注化」は一見関係ないように思われるが、原材料処理を家庭で行わなくても食事が作れるようになったことによって個食化が可能となったことを考えると、両者には密接な関係がある。
  - 1970年代半ばに日本に登場したコンビニは、働く女性の増加に伴い家事の負担を軽減したいという女性の声に後押しされて80年代に急成長した。
11. 「効率性」を重視するという考え方と関係ないのはどれか。
- 名前の代わりに識別番号を振ったことで、情報管理が迅速に行えるようになった。
  - 市町村合併に伴い、地名を住民投票で決定する。
  - 短期留学における成果を確実にするために、留学前研修を充実させる。
  - 電子メールで多数の人に同時にメッセージを送る。
12. 「コミュニケーションによって自己を意味づける存在」とはどのような意味か。最も適切なものを選びなさい。
- 言語を用いることによって他者に自らの意図を正確に伝えることができる存在。
  - 言語だけに頼ることなく他者に自らの意図を伝えることができる存在。
  - 分かり合えるということを前提に、他者との信頼関係の構築を図れる存在。
  - 他者との関係性の中で自己を確認する作業を行う存在。
13. 2ページの空欄にはいる言葉として適当なのは次のうちのどれか。
- 弁証法的
  - 主体的
  - 共同体的
  - 他者依存的

14. 本文中にてでくる「疎外」という概念を最もよく表す文章はどれか。
- 人間が主人公であるべき社会が、人間にとってよそよそしいものに思えること。
  - 集団の中における異質な存在が疎まれ、のけ者であるかのように扱われること。
  - 異なる背景を持つ人々が対立を避けるために希薄な関係に陥ってしまうこと。
  - 自ら壁を作って、人となるべく関係を持たないような行動をとってしまうこと。
15. 都市における監視カメラの設置台数が増えた要因として適切でないのは、次のうちのどれか。
- 都市部における刑法犯の認知件数が急速に増加しているため。
  - 監視カメラの設置がルーティーン化していったため。
  - 監視カメラを設置するためのインフラ整備が進んだため。
  - 比較的安価で高性能な監視カメラが普及してきたため。
16. カメラによらない監視の形が進むことの危険性に関して、最も適切な記述は次のうちのどれか。
- 常に監視されている状態となり、相互の不信感が募り些細な争いが絶えなくなる。
  - テクノロジーの進歩に頼りすぎると、誤差から生じるミスを見逃してしまい、重大な犯罪の誘発につながりかねない。
  - 個人情報の蓄積がさらに進み、個人の特定・追跡が容易になる。
  - 治安活動と諜報活動の境界があいまいになり、個人情報が独り歩きしてしまいかねない。
17. 世論調査などの意識調査に関して、次の記述の中で適切でないのはどれか。
- 同じような内容でも質問の仕方によって回答が変わってくる。
  - 母集団と標本の構成比率が違う場合は統計処理の工夫を必要とする。
  - 標本抽出のやり方で結果が変わる場合もある。
  - 結果の数字の解釈が主観的でないとはいえない。
18. テクノロジーの発達と人間活動の関係について、次の記述の中で最も適切なものはどれか。
- あらゆる職域におけるテクノロジーの広がりにより、重労働や単純労働からほぼ解放された。
  - テクノロジーの発達は、南北格差が解消されることに寄与した。
  - そう遠くない未来に、「より速く、より多く」を目指すテクノロジーの恩恵を世界中の人々が享受できるようになる。
  - テクノロジーの発達による余剰時間の創出は、人々を更なる活動へと駆り立てた。

19. 「全体主義社会」を説明するのに最も適切な記述はどれか。
- a. 計画経済を進めるために、私企業間の自由競争は禁止される。
  - b. 国家による管理が強化されるため、効率的な産業計画が行える。
  - c. 国家利益を優先させる権力思想である。
  - d. 個人の利益追求は、公共の秩序を乱さないかぎり認められる。
20. 本文中に述べられている「現在私たちが経験している監視社会」とはどういったものか。最も近いものを選べ。
- a. 監視する主体が誰だかわかりにくい、監視にまつわる権力は一極に集中している。
  - b. 監視する主体が誰だかわかりにくい、監視も偏在化している。
  - c. 監視されることは好まないが、監視することは必要だとされている。
  - d. 超越的権力を有した存在がいなくなったため、監視の意味があいまいになっている。
21. 監視カメラの設置に関して、筆者はどのように考えていると思われるか。次のうちから最も近いものを選べ。
- a. 社会の要請なのである程度の設置はやむをえない。
  - b. 対価に見合うだけの効果を挙げていないので、設置を見合わせるべきである。
  - c. 設置を望む声の高まりが何を意味するのかよく考えるべきである。
  - d. 設置を望む声がある以上、多数の意見を聞くことによって設置を決めるべきである。
22. 4ページの空欄にはいる言葉として最も適切なのは次のうちのどれか。
- a. 共犯
  - b. 補完
  - c. 協働
  - d. 共存
23. 「環境管理型権力」が発動されていると思われる例はどれか。最も適切だと思われるものを選べ。
- a. 交通ルールがあるから赤信号では止まる。
  - b. みんなが止まるから赤信号では止まる。
  - c. 赤信号で渡ると危険なので止まる。
  - d. 赤を指している信号機があるから止まる。



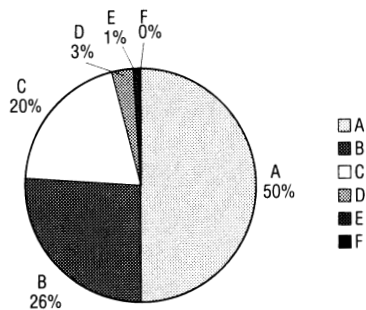
24. 「情報テクノロジーは単なるコミュニケーションのための道具ではない」とはどういう意味か。次の中から最も適切だと思われるものを選び。
- a. 情報テクノロジーは、私たちが誰であるのかを意味付ける社会生産的機能をもつ。
  - b. 情報テクノロジーは、我々の主体的な参画により始めて本来の機能を発揮する。
  - c. 情報テクノロジーは、複雑なコード化を一瞬のうちに行ってくれる。
  - d. 情報テクノロジーがなければ、もはや我々の日常生活は成り立たない。
25. 「データベース化された世界」の説明として適切でないものはどれか。
- a. データベースは個人の日常活動の細部にわたる再構成を可能にする。
  - b. 言語やイメージなどの電子的複製は、コミュニケーションの時間的、空間的限界を無化する。
  - c. 情報再生産を可能とするテクノロジーは、すべての消費者を生産者にする可能性を生み出した。
  - d. 情報のアナログからデジタル化への移行は、情報の加工を容易なものから複雑なものにした。
26. 「逸脱の履歴」が自らに跳ね返ってくるとはどういうことなのか。次の中で適切でないものはどれか。
- a. 自身に関する情報が一人歩きし、気付かないうちに「高リスク集団」の中に分類されてしまう可能性がある。
  - b. データベースのフィールドにおける数値化された情報はあいまいさを含まないの  
で、断片的に抽出されたときにコンテキストが抜け落ちた情報として誤解を生む。
  - c. データベースの構造・文法が、情報の要素間の関係の中にデータベースの外では存在しないような関係を創作する可能性がある。
  - d. データベースから出力された情報が、ヴァーチャルな世界でしか通用しない履歴を生み出す。
27. 空間と対人関係の変化に関して、次の記述の中で適切でないのはどれか。
- a. 強固なセキュリティ・システムを備えた居住空間は、外部に対しては壁を作るが内部の対人関係は密になる。
  - b. 都市部における郊外化が進んだことにより、駅前の商店街や中心地から人が減り対人関係が以前にもまして希薄になった。
  - c. 地域共同体の消失は家族を閉ざされた空間に押し込むこととなり、家庭内での対人関係が窮屈なものとなっていった。
  - d. 福祉設備を充実させた高齢者だけの共同体を作ることは、高齢者の社会とのつながりを奪うことになりかねない。

28. ハーバーマスの「生活世界の植民地化」に、あてはまらないのはどれか。
- 住民の情報を正確かつ効率的に伝達するための手段として、インターネットを利用する。
  - 家族の中の問題が法律的に処理された場合、本来の目的と乖離した判決が出現する可能性が増大する。
  - 教育の場における過度の規制は責任を回避する態度を生み、生徒の活力を奪ってしまう可能性がある。
  - 地方自治体が住民からの苦情処理のためにオンブズマン制度を導入する。
29. 地縁や血縁に基づく関係と最も関連する概念は、次のうちのどれか。
- アソシエーション
  - ゲマインシャフト
  - コルホーズ
  - キブツ
30. 筆者は、都市空間において自己はどのように変化する可能性があると考えているのだろうか。最も適切だと思われるものは次のうちのどれか。
- 偶然性や匿名性が自己の可能性を広げる。
  - 地縁、血縁に縛られない自由な関係の中で、自立心が養われる。
  - 多種多様な人間の中で、アイデンティティの確立が促される。
  - 都市に顕著に現れる様々な問題を通じて、社会改革への意識が高まる。
31. 自動車は近代イデオロギーの象徴であるといわれるが、何を象徴しているのか。あてはまらないものはどれか。
- 人間に対する機械の勝利
  - ゆとりある生活
  - 資本主義の浸透
  - 貧富の差の容認
32. 本文中にてでくる「基幹通貨」と「地域通貨」の関係と最も類似していると思われるものは次のうちのどれか。
- ドルとユーロ
  - 一般道と高速道路
  - 上水道と下水道
  - 石油エネルギーと代替エネルギー

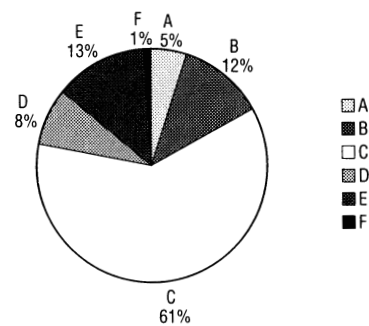
33. 世界の地域別インターネットの普及に関し、次のグラフ（2000年2月）のB、C、Dにあたる地域は、アジア・太平洋、米国・カナダ、南アメリカ、ヨーロッパ、中東、アフリカのうちどれか。下記の組み合わせから1つ選べ。

- アジア・太平洋、ヨーロッパ、アフリカ
- 米国・カナダ、アジア・太平洋、中東
- ヨーロッパ、アジア・太平洋、南アメリカ
- 南アメリカ、アフリカ、中東

インターネット利用者数



総人口



総務省『平成12年版通信白書』、

URL: [http://www.soumu.go.jp/joho\\_tsusin/policyreports/japanese/papers/h12/html/C1641000.html](http://www.soumu.go.jp/joho_tsusin/policyreports/japanese/papers/h12/html/C1641000.html)

34. テレビやラジオといった既存のメディアの特徴として適切でないのは次のうちのどれか。
- 不特定多数の人にメッセージが配信される。
  - 社会的なリアリティの構築に重大な作用を及ぼす。
  - 何が問題とされているのかという議題を提示する機能を持つ。
  - オーディエンスの態度の決定に常に大きな影響力を行使している。
35. 8ページの空欄にはいる言葉として適切なのは次のうちのどれか。
- ローカル
  - スタンダード
  - フレキシブル
  - インタラクティブ

36. 筆者が主張する「有機的なつながり」に最も近い記述はどれか。
- a. 自身が変化することによって他者も変化するという連関が広がっていく。
  - b. 他者の立場に立つことによって他者と共有する部分を徐々に増やしていく。
  - c. 安易に他者を判断することなく自分と他者のつながりを見出していく。
  - d. 異なる価値観を持つもの同士が議論や葛藤を通して相互に理解を深めていく。
37. この文章で筆者が主張している内容と異なるのはどれか。
- a. 自己と周りの世界との関係を問い直すことによって、我々の日常を取り巻く様々な力と対峙していかなければならない。
  - b. 近代化と効率化の関係を明らかにすることにより、これからの我々と世界との関係を再構築していく必要がある。
  - c. 監視を望む人々の声に積極的に耳を傾けることで、改めて監視社会の意味を問い直す必要がある。
  - d. サイバースペースにおけるコミュニケーションの功罪を考慮したうえで、これまでにない関係性の広がりを模索していく必要がある。
38. 筆者が考えているコミュニケーションと相容れない考え方はどれか。
- a. コミュニケーションとは絶え間ない意味づけのプロセスである。
  - b. コミュニケーションとは自分の意図を相手に伝える道具である。
  - c. コミュニケーションとはメディアである。
  - d. コミュニケーションとは創造的なプロセスである。
39. 「記号化された人間」とはどういう意味か、次の中から最も近いものを選び。
- a. 社会のあらゆる変化に合わせて適応していかざるを得ない存在。
  - b. 自己を取り巻く様々なシステムにあって、それぞれで意味付けされる存在。
  - c. 単純化され、まわりとのつながりを失った存在。
  - d. 高度なシステムの中にあって、抽象的にならざるを得ない存在。
40. 「強権を発動する権力の主体はもはやいないと考えた方がよい」とは具体的にどういうことか。次の中から最も適切なものを選び。
- a. 権力装置の中心は空洞であり、そこに力を持った者が集まることにより強権が生まれる。
  - b. 我々をある一定の方向へと促す力に、まさに我々自身が関与している。
  - c. 現代では、権力を持った暴力的な主体を想定することはできない。
  - d. 権力装置の中心に自身が積極的にかかわることにより、強権を変えられる主体となり得る。

